

【史料紹介】松村流松明・甲賀流武術秘伝

山田雄司

「松村流松明甲賀流武術秘伝」は伊賀流忍者博物館所蔵「沖森文庫」のうちの一書である。縦二九・四センチ、横二〇・二センチ。線装本。全四二丁。一冊。外題に「松村流松明 甲賀流武術 秘伝」とある。内第にも「松村流松明 甲賀流武術 秘伝」とある。江戸時代の書写だが、成立年代は不明。奥書に「右京都東洞院去家ヨリ千金不伝之雖秘術有所以受相伝所也」とあることから、原本は京都東洞院の某家に所蔵されていたようである。

内容は、種々の松明、狼煙、火箭などの調法をはじめとして、人睡法、烟に不咽法、白文之法、夜中不寝法、舟に不酔法、さらには、耳の中へ虫の入たるを出す法、小豆早くたき様、餅のかびさる仕様等々、日常の知恵のようなもので多岐にわたり、守札の作成法も書かれている。前半の火術に関する部分が「松村流松明」なのであろうが、松村流は不詳である。また、「甲賀流武術」とありながら、武術に関する記述は一切ないことも不明である。呪術的側面とともに実用的側面もあわせもっており、実際に効用があると思われる手法も少なくない。

翻刻にあたっては川崎伸太郎氏の協力を得、またハイトピア伊賀において開催している古文書講座受講生の方々からも意見を賜ったことをここに記して感謝したい。

松村流松明
甲賀流武術 秘伝

狼烟之術

狼糞^{三分一} 松葉^{四分一} 藁^六

口決曰、右内へ鉄炮之筒藁四分一入へし、煙高し、

松明之法

常の松明には松木を割、細繩にて結心^シに入て、外は竹などにする也、消たる時振立れば、燃上る事早し、

又法

楠木を細に割、油ぬりほし付て細繩にて束へし、是を五厘松明と云、

又法

椀の皮を厚く^(附)へき、硫黄をせうちう^(附)にてとき、二遍程付松明にする也、雨風強によし、

水松明

明凡^(註) 鼠糞^{一匁} 松の肉^{五分} 芥葉^{一匁} 生腦^{五分} 塩硝^{五分} 膽
礬^{五分} 麻灰^{一匁}

右細末にして竹筒に込み、堅くして鉄炮の口薬を立
る、強き雨風に水に入てもきへす、但し音高し、

懐中松明

長さ四五寸に杉板を割、尖に硫黄を少し付て持也、是斥候
松明とて忍に所持して窓より内をみる^二用、

衣松明

衣松明とは苧四五本に木帛をまき、松脂をぬり、干付て束
ぬ、雨にても不消、又一本つゝもともす、夜討などよし、

投松明

竹を細にわり、松の木にませて束、松明の長は式尺三尺に
もして、もと細く重りを付て釣合をよく拵へ、四五寸斗り
の釘を打也、又籠火と云は取籠などの時吉、
鉄にてまるく作る也、委は有図、

籠火蠟燭之法

膽礬^{八匁} 生腦^{五分} 松脂^{五分} 硫黄^{三匁} 塩硝^{五分}

右蠟燭のこたく堅く尖に口薬を少し入てともす、水掛て
も不消、

楯松明之法

楯板は柳よし、厚八分長式尺横六寸大方也、
熱馬の事、是は夜討の時馬に松脂を付、敵の中へ追込な
り、此時は松明例に付て吉、多少敵による、馬は小荷駄な
るへし、松明は小繩壺筋にて荷鞍に結付て早くもへ消する
事有へし、

卷火箭之事

塩硝^{五分} 硫黄^{三匁} 鉄砂^{三匁} 桐の灰^{五分}

右細にして筒にこみ、薬りに火を付け、夜討に敵の中へ
投入、箭焼様図のことし、

巾着火の事

少^(小)き香爐に火をいけ、巾着に入持へし、杉原の黒焼をふの
りにて煉り堅め、火を付け板に挟み持也、

火口の事

た^(煙草)は粉の茎^{黒焼五分} 塩硝^{一匁}

右末にして竹の筒に入もつへし、火の付事め^(二)う也、

生滅松明

塩硝^{廿匁} 生腦^{百匁} 硫黄^{廿五匁} 松脂^{三匁}

右手松明の如く作るへし、

有明燈心

木綿いと太きを塩に浸し、油に入燈すへし、但し三日程塩にひたしてよし、

玉火の法

生腦六十匁 ひまし（鹿麻子）十匁皮を去 灰一匁五分

右三色よく調合して其俣堅め、是法籠火水松明、

又法

塩硝少し 硫黄少し中 灰少

右合て漿水に堅む、

水松明之法

明凡（變） 生腦 蓬艾 松脂 塩硝 硫黄 灰

何も等分、但し硫黄少し、是も女のかね（鉄懸）に能、酒少し入て堅む、

狼煙之法

蛇（から）の脱雨露にあたらさると狼の糞と合せ烽に焼へし、

仕込葉の法

やう灰胡椒山椒（トカゲ）下腹赤きをほし粉にする 右等分に檜木の筒拵へて道具に付て用る、敵の眼あく事なし、

流火

上松（細く割長く） 生腦大 硫黄中

右二色を古酒をもつて煉、割松を編み何遍も引て、八九寸まわりに長さ三尺に結へし、

埋火の方

廿目玉程に団灰をこしらへ、杉原かみによき酒廿遍引干、火を放し銅筒へ入、筒の蓋打きせ、少（小）き穴三所にあくる、筒の覆黒皮にてつゝむなり、

火箭の方

塩硝廿匁 硫黄二匁 麻灰（四匁）

右三いろ合、廻一尺長一尺五寸張筒煉筒松の木筒吉作り、筒（小）少は長短不定也、箭羽付様仕掛有り、箭去方に忍し事吉、

上火の方

塩硝十匁 麻灰二匁 硫黄一匁 生腦五分

右合様は同前（ホウロウ）、火箭焼玉に吉、大なる火業也、

人睡法

赤鯪の膽を取り、日にほし粉にして火に焼へし、其俛寝入なり、

煙に不咽方

ぬれ手拭にて顔を包てかけ通るへし、

又法

大根をしほり克く紙にしめし^(襪)、日に干てはしめし、何遍もして懷中し、煙の中へ入とき口の中にて可嚙、

風呂薬

米少し塩少しを釜のうちへ入時は、何程焼ても不立、

白文之法

白かみに大豆を細に割み、水にひたし、其汁にて書、又酒にて書、日に干て通用する、
可出見時は鍋すみをかけ、可見すみなき時は水にひたしみる也、

夜中不寝薬

挽茶^{四匁} ^{アサリ} 蝸^{陸千四匁} 各等分合用ゆ、

海中の水を取事

海中に水すく有之もの也、汲上暫く過て塩は沉むもの也、其時上水を取用る也、

又取様

食を炊鍋の底に茶碗をふせ米を上へいれて焼へし、塩は皆茶碗へ入る也、

舟に不酔方

白角豆を粉にして梅干の肉によく／＼煉合せ用ゆへし、

船中より海の底をみる法

あはひのわたを口にふくみ、水中へ吐てみるへし、何丈有ても見ゆるなり、

火遠近の見分様之事

我手を目の下に当てみるへし、手の内へ火かくるゝは此方へ来る也、火たん／＼と出るは向へ行火也、

五性を歩行形知る事

- 一、木性の人は腰より下すわり、腰より上動なり、
- 一、火性の人は自然とさわかしく歩行ものなり、
- 一、土性の人は姿重くしとやかにして、真直に道行也、

一、金性の人は小きさみにしてかたく歩行なり、

一、水性の人は自然とくくく如此なり、

一、何にても高く見へかぬるは、あをのきにはかりみるへし、

刀脇差乱正焼を鞘の外より知る事

一、真すく成ところに置みるに、乱れ焼はかたむくもの也、正焼はかたむかす、

腫物即時にいゆる法

一、あひるの玉子すりつふし、灰をませ土用に干し、其後使ふなり、

舟に不酔方

一、舟にのらんと思は、クサメ三つしてのるへし、

夜道難遁るゝ事

一、其時に望れば、先眼を塞き内歯まかしらを指にておしてみるへし、眼中金輪みゆるもの也、

不意の難にあふ時は、金輪見へぬなり、

同怪実性顕す事

怪と思は、我左りの袖口よりのそき見るへし、化ものならは生の形顯るゝなり、

同五町四方人来るを知る法

一、此法はへらははいになり、地に耳を付て居る也、五町四方の人足ひゝくもの也、臆病ものは足音地につかす足音乱れ、響き剛人は足音慥也、

雨降出し長短を知る事

長 子辰申 歌に曰

一日 丑巳酉 子は長く丑は一日寅は半

半日 寅午戌 卯の一時とかへらてそくる

一時 卯未亥

辻占行時うたに

もゝ辻やよつしかうらのいちの辻うらまさしられ辻うらの神

臆病人を剛氣にする事

雷にて裂たる木を削り、粉にし吞へし、剛人になるなり、

難馬留様

先馬に立向て五尺程此方より一声かける也、

船難を知る術

一、舟にのらんと思わ、うつむきて股よりうしろさまに、中に居る人の顔を見るへし、人毎の顔にきへみゆるもの也、其船決し破船なり、

呪留様

一、男は左女は右の手の内に犬といふ字を三遍書へし、

耳の中へ虫の入たるを出す法

生のにらの汁を醋と合せ耳へ壺滴入るに、忽出る事妙なり、

毒を知る術

一、湯茶酒などに向ひ我影うつらさるは毒有と知へし、

闇夜に眼みゆる術

極上々吉の水晶にて如



此のもの拵へ、此中へ水銀を

入此所口依、

男女共に呼出す法

一、すしに無しに十文字そこ立給へひめくるみの神

アヒラウンケンソワカ如此三遍唱ふ、七月十四日門火の

炭にて右歌と姓名を書門にはる、

人睡法

一、山ひる陰干にしてこよりにしてともすか、又は火にたくへし、

万符守造吉日

丙 午辰 丁酉 庚寅

戌 子寅辰申午 癸 卯酉

壬 子寅酉

守開眼の文

天上自在諸天歛喜符神呪娑婆阿太

何れも符守を拵、其後かつしやうして此文を唱ふへし、

加持の事

ナウマクサンマンダ。ハサラダンセンタ。マカロシヤダソワタヤ。ウンタラタカンマン

此真言は慈悲の呪と云て、不動の陀羅尼也、口の文を唱へ、其次に又此文をとなふへし、

行先の守

天龍瓊命勝水唵急如律令

是を何方へ行にしても、是にかけ行へし、

疱瘡の守

此はたれわかさおはまの孫左衛門か子也

ほうそうするものゝ名を初に書て、方々におすへし、

大病あらはかるくほうそうするなり此方しんじがたし

盗人用心の咒

そつか

とつ犬 しみん 光明真言三遍となふへし、

中たつ

是をおもての方うらの方にむかひてかくまねをしておくへし、

男女おこりの符



一切のさいなんをはらふ符



訴訟の時の守



一切ノ口舌ヲ除符



貧人富貴成符

きねんすへし

万怪敷物有時守



人のうらみ来る時符



盗人の跡に立ればあらわるゝ法



口舌事に立る符



思ふ事叶符



此符枕の下におくへし

女男にゑん遠き守



此符ふたん首にかけよ、男にはやくゑんてくる也、

男女の中をはなれん時符



女男の中をはなれん時符



此守を常くひにかくれば、男の手をはなれる事奇妙也、

萬人和合の符



女の乳をいたす符



公事沙汰勝符



生子夜なきの符



此符をはしらにおすへし、

みそ醋(味噌)となる時ましない

大分あるみそにても、其真中へ炭をさし込て、其上に急如律令此五字をかみに書ておくへし、尤奇めうなり、

わきがの妙薬

蜜陀僧(僧)をこにしてぬるへし、

しらくほ(白麴)の妙薬

すゝをこま(胡粉)のあふらにてとき付へし、

馬のはらの病



此符を草にそへてのますへし、

中風大事

桑葉五十々湯をかけて干 黒胡麻白々少しりて 黒皮を去、此二味粉薬にな

りとも、又は蜜にてねり、又は丸薬になり共して、湯か酒にて用ゆ、

(疾) やく病のましない

(塞) よしのはを門戸にかけおけは、やく病其家にいらす、

食傷の大事

升麻十々 檳榔十々 棉子一々 是を粉にしてゆにて用ゆ、

(酔) 酒五ひたるましない

梨水 此二字を昏に書、水にて用ゆ、

(塞) むかてくひたる大事

たてのはをもみしほり、汁を付へし、

脱肛の大事

蛤貝をせんし、其汁にて洗、

痔の大事

蛻をせんし、其汁にて洗、

小便とちたる大事

菅をせんしこし、湯すへし、

大便同断

青苦葉アラキハ 葛の粉一々 右粉にして酒にて用、

腫物薬

鮒やまのいも等分すりたゝかしはり付る、尤腫物の頭の所のこしては
る也、右之上を杉原昏にてはる、

耳たれ

大根のしほり汁をこよりにて付る、

(生) 気を詰(動)はうこきいたむに

南天のはをふくむへし、

しやくり

柿のへたを粉にして用ゆ、せんしても吉、

目の病

大した(辛唐)のはせんし、辰砂少し加へさいく洗、

おこり

山椒五分 もくさ二匁 合せ水にて常のことくせんし用、

血とめ

杉原紙香いろにあふり付てよし、

やけどの大事

こきし(醬油)やうゆ(油)をぬるへし、

補薬

かちぐり粉にしてち(乳)にしめし二三度ほし、其後二三度つゝ湯にて用ゆ、

養生

毎朝胡椒二三粒腹して吉、冬用れはふう(風氣)きに合す、馬の汗大毒と知へし、

同

寒三十日毎朝水二三口つゝ服すれば、一切病生せず、同齒に甚妙なり、

水にあてられぬ事

田にしを醬油にていり付、よくほして用ゆ、

乳のたる薬

あつき(小豆)の汁をさいく用ゆ、

あと(後髪)はらいたまぬ大事

麻の苧をはら帯にする、

はしり痔妙薬

しゆろ(棕櫚)の皮を黒焼にして湯にて用、

何にても面の病治

白附子を酒ひたしつくへし、

かほ(鼻)のき(生地)ちよくする

かも瓜(實)のさね(核)を(粉)こにして丸し、常に用ゆへし、

渋の付たる時

とうしんをせんしあらふ、又かつをふしをせんし洗、

もちの付たるは

としやうのぬめりにて洗、

齒くろの付たるは

米のす(餅)をせんし洗、

血の付たるは

と(灯心)しんをつ(蠟)はにてぬらしするへし、

魚鳥の血油付たるは

か(糞)ふらの汁にてあらふ、

紅染あい染などにもりあめかゝりたるは

しほゆにて洗、

漆并やにの付たるは

みそ汁をせんし洗、

あい汁(藍)の物おとすには

石灰水にて煮れはことくく落る、

又は食つふにてもみあらへは大かたおつる、

真虫(蠟)にさゝれたる時

ほうき木のはを付へし、妙なり、

血留

青木葉のはを摺、奉書の紙に六七遍ひたし、其紙引きき付へし、



順にくる尤女の子也、留月

木

酉戌亥子丑寅卯

辰巳午未申

五年むけ

火

子丑寅卯辰巳午

未申酉戌亥

土

午未申酉戌亥子

丑寅卯辰巳

金

辰巳午未申酉

戌亥子丑寅

水

午未申酉戌亥子

丑寅卯辰巳

白玉か何そと人の向ひし時 下略

此歌を恋しき人の門に立三遍唱ふれば、其人自分出て来る事妙なり、

子をうみとまらんと思ふ大事

鳳仙花美をさん(御座後)こにのますへし、必うみとまる也、

声出る法

桔梗 乾姜及 烏梅

甘草五分

右粉にして湯にて用ゆ、

同一方

柯子散

柯子 杏仁 貝母 甘草各二分

右粉にし生姜の汁にて腹すへし、

変形術

白瓜仁条瓜のき五兩 白楊皮二兩 桃花四兩

日に三度飲也、面色白からん事を思わ、瓜仁を加ふる也、紅いならん

と思ふは桃花を加ふ、十日にして面て白く五十日にして手足共に白し、

色黒を白く成す術

一、冬瓜かもり一を竹へらにて皮を去切へぎて、酒一升五合と水壺升を以

て煮たらかし、滓をこし去、又煮つめてかう(煮)となし、毎夜惣身にぬるなり、

毎月思欲色欲深く蔽になす日の事

一 毎月 朔日 十五日 八日 廿三日 廿一日 廿八日 晦日 私考、廿二日 廿七日 庚申甲子

右之日急度慎へし、此日交合すれば寿命損し身に難あり、

女月水始て来る日を知る術

一、女子出生の日より五千四十八日目に経水始て来る也、

此日数年に積りて十四才なり、難産を平産にする術は、

一、出生しかぬるには蓮花一葉に人といふ字を書て吉也、直に平産する也、

面上の厭黒子ほくろを去る術

一、七月七日平時、真桑瓜の葉を七枚取り、真に如例の南向の堂へ入りて、南に向ひ立て七枚の葉にてほくろを拭へし、滅し去也、

役者紅葉の方

一、唐麩のからを二三日も続きよき天氣と思ふ日を考へ、陰干にしてよく干、朝夕湯を遣ふ、是にあらんこと成也、油あかを取つやよく成事甚妙也、

鍋釜かなけ出るを留る法

一、新き鍋釜に金け出るは、初に其鍋の内にてわらを焼灰になし、さまし置て後灰を取り、鍋の中へ油をぬり、ぬる火にかけて乾し、よくさめたる時あらいて用也、二度発る事なし、

鍋釜もり即座に留様

一、穴明て水のものには、白鐵しろめをわかしふさく也、

精進物塩早く出し様

一、塩を出す其水の中へ渋を少し加へて塩を出すへし、渋なくは柿の

葉を入たるよし、

小豆早くたき様

一、あつきを早く煮るには、砂糖を少し入てたくへし、早くにへるなり、

たこ和らかに煮様

一、早くにるにはせんし茶少し入てたけは、早く和らかに成也、

飯片(煮)にへ仕たる直し様

一、酒を少しうち蓋をし、火氣を通すへし、

同こげくさを直し様

一、なわどうちを洗てめしの上に置、蓋をして暫く置は其香さる也、

紅染紅抜やう

一、染たる紅ぬくには、早稲藁(わら)の灰汁にてもみて洗へはよく落る也、

胎内の子男女を見方る事

先へ婦人行時、後よりよひかくるに、左の方より見かへるは男子、右の方を見るは女子となす、又懐妊の婦人かわやへ行時、夫うしろよりよひかくるに、右のことくにて知るなり、

子をまふくる法

一、婦人月水たへて後、一日三日五日目に夜半の後やとるを男とす、必命長く知さとく、月水たへて後二日四日六日めにやとるを女とす、六日を過てはやとらず、

肌をよくする法

一、滑石二反 白檀二兩 小豆五石 右何れも粉にして肌にぬりあらへは、身につや出て肌を細かにきちよく成也、

卵を自由に遣ひ様

玉子を煮ぬき皮をむき、醋に漬置暫有て取出し、菊なにとに切形し、料理に妙也、

暑の時分食物に臭気なき貯様

一、香椒をその食物の上に置へし、臭気なからしむ、

百日百夜寝すして氣力おとろへさる法

昼夜寝さる事連日なれば、氣力つかれて事を勤むる事成難し、此時は牡蛎のからを粉にしてのむへし、氣力強く事をつとむるにものうからす、

火事遠近見知法

一、夜の火事は火先の物に写る方近くみゆる、又月夜には白くみゆ

る、又民家の焼る煙は黒く厚く見へ、其余は大方うすく見ゆると知へし、

声かれて出さる時早速出す方

大根のしほり汁に生姜の汁を少し加へかき廻し吞へし、元の如く出る也、

又方

一、さいかちのとけ五分 大根へきて三枚、右二色煎し吞へし、

思ふ時目を明術

一、男子は左りの手の裏、女は右の手の裏、指にて大の字を三遍かき、夫をなめ、其後此歌を三遍よむなり、

打とけてもしもまどろむ事あらは 引おとろかせ我枕神 と唱ふへし、思ふ俣に起らるゝ事奇妙也

蕎麦大分食仕様

一、山桃シワキの皮を粉にして吞て後蕎麦を食すへし、飛食して腹のはりたる時ははりを直す薬也、

声の出る薬法クスリ

黒大豆五合 氷砂糖半斤

右水壺升五合入、五合に煎しつめ、其煎し汁を折々吞也、かれ

た声でも前日よく吞はよく日の役に立もの也、

家内の邪気又病気によりて毎夜悪き夢をみて、通宵寝ることならざるを安く鎮る術

一、辰砂の煎鏝のこたく成を紅の袋に入れてもとり掛て寝るへし、悪夢なし、

夫婦中のあしきを相むつまじく愛する術

一、五月五日に鳴鳩の脚脛骨あしのほねをとりて紅の袋に入れて、男は左女は右の手に掛へし、常に袂に入置てもよしと云、

憎気嫉妬深き婦人を妬なからしむる術

一、鶯を煮て食はしむへし、妬をわするゝなり、

同術

一、赤黍と薏苡仁等分丸として常に婦人に吞しむへし、妬ことなし、

親に不孝夫に順さる女を孝順に成術

一、狗の肝をとりて土にませて籠とぬる時はいつと孝順になる、

女の外に心あるを顕す術

一、東の方へ行馬の蹄の下の土をとりて、女の衣類にかくし入へし、其人言葉に顕るゝ也、

人の形をかくして他人に見せざる術

一、青犬か白犬かの膽をとりて通草桂に和して丸薬として腹する時

は、隠形して他人の目に見へず、

一、八月晦日の夜半に北に向ひ烏鷄子を吞へし、形隠るゝ事心の俣なり、

目を覚す術

一、馬の頭の骨を枕とすへし、

小兒夜寝かねるを直す術

一、焼尸場の土を枕もとに置へし、

一切腫物を免るゝ術

一、小兒毎年六月六日其年の数種^{さいかち}巨茨の実を吞へし、出来ものゝ患

なし、又大人ならば七粒又は廿一粒を吞へし、

心に願ひ求る事^{にはとりおとりのけ}忽叶ふ術

一、雄^{にはとりおとりのけ}鳥毛を焼て酒の中にしたして飲へし、求る事必成就す、

同術

五月五日戊辰の日、猪の頭を以て釜土に祭る時は心の俣なり、

五穀なき所にてうへさる術

白茅根を取てあらひ咀^{かみ}喰ふへし、又石の上にて晒し搗て末となし、方

寸七つゝ吞へし、饑事少し、

亀を水に放して沈さる術

一、亀の目へ香^{ごまのあふち}油をぬるへし、妙也、

炭火のはせるを止る術

一、塩を少し斗り火の中へ入る時は其火はせる事なし、

蓮池に用心すへき事

一、桐を近辺にうゆる時はかれる也、

漆にまけぬ術

一、川椒をかみて鼻の上^にぬるへし、かふるゝ事なし、

物に驚く馬を驚かさぬ術

一、狼の尾を馬の胸のまへに掛る、驚く事なし、

胡蝶を高く飛す術

一、胡蝶を取りて翅^{つば}をぬる時はは高く上る也、

餅のかびさる仕様

一、餅を入る桶のはだへ酒をぬりてのちもちを入、蓋をよくして納置へし、此ことくすれはいつ迄もかひわたらず、

終夜寝ずして眠さる薬

- 一、ねむりて堪へかたきには鼠の糞を臍に当て、其上に紙を張るへし、

怪事有時早く目を明く術

- 一、いぬる時我いぬる下の方と上の方に空より森如此三遍つゝ書いてぬへし、盜賊火炎すへて怪き事あれば目を覚すなり、

懐任か懐任にあらざるを知る法

- 一、艾を火にかけて醋にひたしかわかし腹すへし、腹痛めははらむなり、いたまざるは懐妊にあらす、

人の眼を見て心中を知る術

- 一、人の心をさつするに眼をみるへし、上をみるは其心高ふりたるなり、下をみるは心に感じ思ふ事有也、又眼てんし(転)動くはいわすして心にうたかひおもんはかる事有、こなたを横さまにみるは我に意なき心としるへし、

遠路を歩いて足の痛まざる術

- 一、此時はあしの甲とうらに胡麻の油をぬれははるる事なし、洗足して後に塩をくちにてかみ、あしのうらにぬりて火にてあふるへし、如此すればあし痛む事なし、
- 一、旅する時は梅干を多くたくわへ持へし、

船に酔わぬ法

- 一、舟にゑふ人は船にのる時塩を臍に当、紙にて其上をはり置へし、

同多いたる時秘法

- 一、付木にてい(麻袋)わうをかゞするがよし、

途中風の肌を通さぬ法

- 一、外へ出て風烈しく風肌に通りにて寒る時は、はなかみをひろけて衣服の間にはさみ入れは風を肌に通さずして風を凌ぎ、寒氣をふせく、

旅中にて飢を凌ぐ術

- 一、旅立の時挽茶を持へし、又蓬もよし、生なからくふへし、

足に豆出来ぬ法

- 一、旅へ行時わうの木一さき懐中すれば、足に豆出来る事なし、

百歳の老人眼光明になす術

- 一、芒硝六匁是水壺蓋六分入てときて、法のことくの日眼をあらふ、一年に至て眼目童子のことし、

三月四日

正月三日 二月八日

四月四日

五月五日

六月四日

七月三日

八月朔日

九月十三日

十月十三日

十一月十六日

十二月五日

女を転し男となす術

一、夫人姪を覚る事あらは、雄黄壹匁を緯袋あちに入胎に付置へし、男子うむなり、

毒酒に当り已に死せんとする時の術

一、緑豆の粉にし水に調へ用ゆへし、妙也、

腫物の跡つやよくする法

一、胡粉を白蜜にてねりて付る也、

寒夜手足こゝへぬ方

一、胡椒を二つに割ほうろくよくいりこかし、紙にて気のぬけぬ様に包、臍に当て居へし、劍術修行の人尤妙なり、

鏡に花鳥画き落さる術

一、雌黄雌黄 輕粉ハツシヤ 硼砂ホウシャ 右粉にして水にかわにてとき、急かきて後火にてやく事半時斗、さめて後常の如く鏡とくへし、

盃の縁よりこほれぬ法

一、没薬を粉にしふちにぬるへし、

大酒してよはぬ法

一、極上々の美濃枝梯へぎて、臍にあててのむへし

色々心得の事

婦人月水の時蓼にんにくをくらへて淋病となる、

孕婦生姜を食へは産るゝ子六ツ指と成、

酒に酔ふて臥風にあたればなまづ生す、

酒後に茶を飲は腎をやふる、

古歌うきことは世にふるほどのならひそと

思ひもしたらて何なけくらん

頭痛一代発さる奇法上総國惠日寺秘方

一、持病に頭痛有て八專節替等に度々おこる者なり、至極治し難し、此方極秘たりといへとも爰に出す、

大黃五匁 靈弱の人は半匁 酒にひたす 丁子一分 当帰老同 酒に浸す

芍薬同上 川芎二匁

右細末にし、一貼にして古茶を煎し、食後に其茶にて用ゆへし、用ゆる時腹帯強くしめ、物によりかゝり、しはらく眠居へし、三包目にて小便赤く通するなり、一代頭痛を治する事妙也、

下血の妙薬

一、持病に下血有は常々榧の実を食すへし、久しくして自愈妙也、

籤刺立て口の塞りたるを抜法トゲ

一、蠅の頭赤とんほうの頭数等分黒やきにして糊になしませ付る、と

け深く立て口ふさき却てうらの方へ近くはうらの方へすい出す也、

錫のくもりを磨法

一、錫くもりたるを磨には毛氈の古きを以てみかくへし、引めなくいろよくなるなり、

銅のくもりたるを磨法

一、やくわんちろりすへて銅類をみかくには、和かなる紙に梅干の肉をつゝみするへし、くもり去ていろよくなるなり、

針皮肉へ折込て出さるを抜法

一、杏仁二ツ搗爛かし車轂に有腹を取りねり合、針の立たる上へぬるへし、忽出る、

渡し船に乗おくれぬ方

一、渡し船有所に行掛りて、或は少おそくて舟出たる跡へ行、或は早くして人数のみつるを待て急用かく事有時は、渡場へ行かゝり一町も此方より渡し舟たに見は、指にて賦の字を三つ舟に目を当書へし、渡し場に至る時舟を出す処へ行つくもの也、

男女陰風去法

一、胡枳の粉を水か唾にてときぬる也、一付て去事妙也、

大に草臥の時保養

一、遠路を歩行して大倦たる時、手巾の類にて股を難く結たるかよし、扱寝る時足をかゝめ臥へし、長く仲す事なかれ、

夏月氷を拵ゆる法

一、銅の器に湯をあくまで泌^{かいら}せ、口をよくつめよく水の入らざる様にして、井底へ重りを付て沈め、半日か又は一日程置取上る也、寒中の氷に替る事なし、

旅蚊帳の法

蝦蟇の油木綿糸によく引て宿にて我伏たる胸の上に一尺斗上までにつり臥へし、何程数多く共五間四方は其夜来らす、

脱肛入湯の秘法

一、菘菜煎^{コウサイケン}し浴する也、脱肛をそろ／＼湯につけ入へし、奇妙／＼

大便の急成を止る法

一、伽羅を一炷程嚙へし、いか様に急成をも妙に留るなり、

真鍮さらに磨法

一、砥の粉を酢にてときみがくへし、

盃の縁より溢れても酒のこほれさる法

一、無名異を盃の縁にぬるへし、酒をとりて縁より高くなりても、外

一滴も溢さる秘、

炭焚て爆ふ留る法

一、泔水に浸し一日余りにして取上げ乾し用ゆ、はせる事なし、

縫針錆さる法

一、胡桃クルミノカラ壳焼て灰にし、其内に入置へし、

遠路歩行草臥さる法

一、長旅をせば毎朝宿を出る時伽羅の油をあしのうらに塗へし、草臥事なし、

葱蒜食し口の臭を去方

一、胡麻を食へし、又酢を一口吞てよし、

酒をのみ酔さる法

一、栢子仁 麻仁各八分

右粉にし酒を飲んとするまへに水或さゆにて用ゆへし、奇妙の法也、此方五臟潤し心神を養ふ、

食物なしにうへさる法

一、口を閉て舌にて上下の齒を啞てつはをためて一日に三百六十度呑込へし、飢事なき妙術なし、(り)

極寒の節冷さる法

一、天門冬 白茯苓 各等分

右細末にし、酒又は水にて毎日多く用ゆへし、

犬の醫痛むカミの法

一、杏仁黒く成程いり水にて付へし、又明礬を付へし、妙也、

子猫鳴てやかましきを留る法

一、陳皮粉にし猫にぬるへし、

犬の子鳴を留る法

一、胡麻の油蛭貝一つ程鼻の孔へ入へし、半日斗して止也、

鬚抜て再生ぬ法

一、白蜜を抜たる穴へ塗へし、二度はへす、

脇臭治する法

一、元朝自身の小便にて洗へし、則治する也、

声の出さるを出す法

一、大根三分 皂角五分 皮実を去

右水を茶碗に一盃入、半分に煎し用ゆ、

血止メ秘法

一、白姜蚕を炒りて黄色にし研細末にして付へし、血止り立処に癒、

事神の如し、

魚の骨咽に立たるを抜法

道にて暑氣に当り薬なきに救ふ法

一、砂糖水吞て吉、

一、朱砂を粉にし水にて少し用ゆ、立処に愈、夏月旅をせは朱砂を持へし、暑氣霍乱に妙也、

眉毛生する奇妙方

鉄上生衣てつじょうのえい 垣上青衣かきじょうのえい

大食の時導引の法

右二色等分に合せ粉にし、水にて塗へし、

一、食に傷られて腹脹は口を閉息を詰て目を空へ見張り、息を喉へつめる様にすへし、如此四五度して後、息を臍下へ引込へし、

目たゞれ赤きを治する法

一、古銭を置塩をのせて焼、其焼たる銭を酢の中へ入れて取出し、綿

山中にて猪野に狼に会さる禁呪

を糸にして銭の汁を目眥へ指へし、忽治する也、

一、朱にて儀唐と云二字書、懐中すへし、

小兒乳吞付さるを治する法

削りたる木本末を知る法

一、白丁香ス、メソフン四つ粉にし、乳頭にぬり飲すへし、但し四五歳の兒ならば十ヲ斗も乳頭にぬるへし、

一、蟻を木の真中に置蚊すへし、極めて末の方へ行なり、

小兒雷に驚くを治する法

痲瘡せさる妙法

一、夏月ならば紅の緒にて袋をぬふて、杏仁七粒皮尖を去入て身に佩さすへし、驚く事なし、

一、絲瓜蒂肉共三寸斗りに切、右糸にてつなき、風の吹く処にかけ置さらし、乾きたる時細にし、少し斗さゆにて用ゆ、

湯茶無処にて渴き留る法

一切小兒の病を除く禁呪

一、白砂糖四十タ 白茯苓三十タ 薄荷十タ 甘草五タ 右共に粉にして煉蜜にて

一、小兒の頭に朱にて天灸と二字書すへし、

棗なつめの大に丸し、一丸を口中にふくむへし、千里行とも渴く事なし、

一、小兒咳出るには、生姜四十タ常の風呂へ入れ置し浴へし、即治する

柑子蜜柑生にて久しくおく法

- 一、菜豆かんの中に入置へし、すれ合ぬ様にすへし、

干鮭からさけ早く煮法

- 一、藁の灰にてあたゝめなまぬる湯に浸し煮るへし、

昆布即座にすこんふにする方

- 一、こんぶ丸なから爪の立程に湯煮をし能くあらひ、下おろしさまに酢を少し指させへ、即すくなるなり、

玉子の善悪を知る事

- 一、小き手桶に八分目程水を入れ、卵を浮せ見るへし、中の損する深きときは沉成れり、

染物茶類一切白衣になす法

- 一、惣而一切の茶染もの白絹にせん思はゞ、酒にて煮るへし、白絹になるなり、

まかい(粉)つむぎ(絹)拵様

- 一、棉子わたみを濃煎こくし、其湯にて粗もめんを煮時は、紬の如く成也、

衣服に油のかゝりたるを去法

- 一、大根の汁をしほり滑石を入れて洗ふへし、

似紫染様

- 一、壳反(蘇芳)そめんと思わゞ極上(井友)すわう(壺)、明はん(二兩半)、随分濃く煎し詰て、天氣の能を考へはりて置、はけにて一返引、其上へ(半草)いもからのあくをひけは、よき色になるなり、

腫物の呪

- 一、何方にても出来ていたまは、我口を以て日出東方乍赤乍黄と唱へ、数々指にて摩すへし、

蛎子うしこにさゝれたる呪

- 一、蛎子にさゝれたれば、事の外かゆく迷惑するもの也、此時蓬の葉をもみ、その汁をぬり付へし、かゆく痛む事忽治する事神の如し、

離別の方

- 一、桃の枝を三寸に切て姓名を書て土に埋めは、夫妻共はなるゝなり、好色秘伝書に出、

汗臭を去匂袋方

- 一、丁子(二兩) 山椒(六分粒)
- 右二味刻絹の袋に入懐中すへし、汗の臭を去也、

懷妊せざる伝

一、しき^{（種）}み^{（子）}一葉^{（子）} 両男のつめにて細にくだき、水にて女に飲すへし、但し一月の内朔日一日なり、

秘術一法

ホウロクニテクロクナルホトニイリ

一、ワタノミ十匁

麝香 壹分^{（分）} 二味共細末ニシノリニテ丸シ、毎月朔日二目方五分つゝ白湯ニテ腹ス、

右京都東洞院去家ヨリ千金不伝之雖秘術有所以受相伝所也、

蜂にさゝれたるまじない

大小にかゝわらす

石を上下を前へカヘス、即効にほてりさめる事奇妙也、

（やまだ ゆうじ 三重大学人文学部）